

ウルドゥー詩に現われる「^{うたかた}泡沫」の觀念

鈴木 木 斌

ウルドゥー古典詩、特にガザルの詩人達に見出される無常感や厭世感については私が兼ね注目しているところであるが、小論では彼らがそれを表わすに当たって共通して用いる表現、比喩を通してこの問題を考察してみることにした。ウルドゥー・ガザルに現われるこの種の比喩としては小論の主題の「泡沫」の他にも「陽炎」「夢」「露」「幻」など幾つかを挙げることができるが、何れも一瞬の存在に過ぎない「泡沫」なる一語に込められた想念をより鮮烈に表わせるものではない。従ってここでは「泡沫」を最も重要な比喩として取り上げ、以下、詩人の作品によってその意味と用法を具体的に調べていくことにする。

「泡沫」なる比喩から我々が直ちに想起するのは「方丈記」の有名な冒頭の一節「ゆく河のながれはたえずして、しかもとの水にあらず。よどみにうかぶうたかたはかつきえかつむすびて、久しくとどまる事なし。世の中にある、人と栖と又かくのごとし」であるが、この世における存在を泡沫に譬

えたガザルとしてまず第一にこれに対比し得るのはガザルの巨匠ミール・タキー・ミール（一七三二—一八一〇）の

わが生は泡沫の如く

この世また かぎろひの如し

なる一詩句であろうと思われる。人の生を川面に浮かぶ泡沫と観する長明とミールの心底に共通して流れるものは東洋的な諦感なのか、絶え間ない川の流れ、結んでは消える泡沫、碎けては散る波飛沫などにこの世の果敢なさを感じ取る心情をウルドゥー・ガザルの詩人達が共有していたのか否かという想いと共に、或いはそれは単なる形式的な表現技法の一つに過ぎないのではないかという疑問も打ち消せない。ここではミールの先の一詩句を中心に据えて、時代順に著名なガザル詩人達の作品を検討していく。「泡沫」はウルドゥー・ガザルではハバーブ（フバーブ）*habab* という男性名詞によって表わされる。引用される一詩句とは半句と半句による対句、ガザルの一シェールである。

まず、デリーの詩壇にウルドゥー・ガザル興隆の基礎を築いたとされるダキニー・ウルドゥーの代表的詩人ワリー（一六六七―一七〇七？）であるが、彼には「泡沫」を詠み込んだ数詩句がある。

幻の現身 吾が目にはかぎりひ

泡沫に似て 水面に映る影

自ら滅び 本源に帰する

この見物 泡沫に見出せり

次に、ミールとソウダーに先んずるデリー詩派前期の著名詩人ハーティム（一六九九―一七八三）をみると、やはり数詩句に「泡沫」が詠まれている。

この世の宿に吾が留まるは

川面の泡沫に似て束の間

人の生は一瞬にして 残るは無

そは恰も川面の泡沫と知るべし

ハーティムのこれらの詩句はそれぞれ一七三九年、一七五五年の作であるが、ワリーとハーティムが用いている「泡沫」の比喩はこの世の果敢なさを例えている点で同質のものといつてよからう。

十八世紀中葉のいわゆるデリー詩派第一期はソウダー、ダルド、ミールのようなウルドゥー詩のウスタードを中心とするガザル隆盛の時期であり、詩句に現われる「泡沫」の用例

ウルドゥー詩に現われる「泡沫」の観念（鈴木）

が非常に多彩且つ豊富になった点で特別な注意が払われねばならない。まず、ウルドゥー・カスィーダの巨匠と称されるソウダー（一七一三―一七八〇）であるが、彼はそのガザルの中でおよそ十九詩句に亘つて「泡沫」ハバーブなる比喩を使つてみせている。しかし見逃せないのはこの比喩の意味するものがワリーやハーティムと較べて明らかに変質していることである。例えばソウダーは「泡沫」を次のように詠んでいる。

汝が視線に会い もし泡の胸砕ければ

口にする水も又 酒の味わいならん

吾が四肢は涙となりて 目より流れ去り

ロープの中 残るは唯 泡の如き心のみ

花園に來たれども吾 何物をも見ず

泡の如 流れの上をそぞろいし そも一瞬

この世をば見たしとぞ思う 泡の如

眼見ひらけば 旅行くは又次なる世

おゝ庭師よ 吾らは川面の泡沫

汝が花園を見るは 束の間

このようにソウダーの詩句に見られる「泡沫」は単にこの世の果敢なさの象徴としてある丈でなく、より現実的な移ろい易いもの、變つてしまふもの、己れの心、恋人の気持などを華麗で技巧的な表現によつて捉える上での比喩として使わ

れているということが出来る。ソウダーのこの「泡沫」の用法は彼がカスィーダを本領とする詩人であつたことと無関係ではない。しかしより重要なのは彼と並び称されたミールの存在であつたと思われるのである。この問題は後述することにして、次にミール・ダルド（一七二〇—一七八四）のガザルを見てみよう。残されている二百余篇のガザルでは九詩句に泡沫が詠み込まれている。

ダルドよ 泡沫の如く眼見開きおれど

この海に 束の間の刻も巡らず

現世は唯無なる鏡に映るのみ

波立てる川 すべて泡沫に帰す

泡沫の如く あゝ壊れ易き世の器

されど吾ら 望み叶えんと足掻く

ダルドのこれらの詩句に見られる「泡沫」がこの世の果敢なさ、移ろい易さを詠んでいることに疑いはない。ムハンマディーヤ派の正統後継者であつたダルドはウルドゥー詩人の中では数少ない本物のスーフィー詩人であるが、彼にとつてはこの世の凡てが無常なのであり、殊更にその思いを「泡沫」に託するような感慨はなかつたのではないかと考えられるのである。

さて、ウルドゥー・ガザルの最高峰と目されているミールであるが、彼の詩集「ディーワーン」一と六に収められてい

るガザル一七九四篇中の二十数詩句に「泡沫」を見出すことができる。「泡沫」はミールによってこの世の果敢なさを指す比喩として完成の域に達したのであり、その代表的詩句はいう迄もなく始めに挙げた

わが生は泡沫の如く

この世また かぎりひの如し

である。ミール以前も以後も、これ程格調高く且つ直截簡明にハバーブを詠んだ詩句を他に求めることは困難である。

ミールはこの詩句の他にも

現世の海に 汝未だにざわめきおれど

死して後知らん この世は泡沫なりしと

という一詩句や

眼閉じおくことこそ可なり

世にありて 泡沫の眼に映するものなし

世の深き海に 逆らひの頭擡げる勿れ

こわ数日の存在 波頭の泡沫なれば

束の間の生に 心騒がせるは何故

波立てるこの海に 汝は泡沫に過ぎず

と詠み、又この世を夢幻と捉えては次のような詩句を残している。

波高きこの刻にありて 汝は泡沫の如く

眼見開けば この世は夢の如し

更には、死と生への疑問をハバープによってこうもいい表わしている。

泡沫の姿 絶えず消えゆくものなれど

その影の 水面に果てることなきは何故

このようにミールは様々な表現技法を駆使し「泡沫」を美事に使いこなしているのである。

ウルドゥー・ガザルは一八〇〇年代の初期から中葉にかけて、いわゆるデリー詩派第二期と呼ばれている第二の隆盛期を迎える。古典詩時代の掉尾を飾る代表的な詩人はゾウク、ガリーブ、モーミンの三人であるが、このウスタード達は「泡沫」の比喩をどのように用いているであろうか。まず、ゾウク（一七八九〜一八五四）であるが、一説には十万詩句を詠んだといわれている彼のガザルで現存するものは僅か二百数十篇に過ぎない。十万詩句という膨大な数はガザルの詩篇にすれば凡そ七、八千篇になるであろうか、これは現実には余りにも多過ぎる数とも思われるが、とにかく、いわゆるセポイの反乱の混乱で大部分の作品が散佚してしまった当時の状況を勘案すれば現存のガザルから「泡沫」の用法を探る他に途はない。ゾウクには十詩句程にハバープの比喩を散見することができるのみである。

泡はいかで果てしなき河となり得ん

砕け散り 河と合することなかりせば

ウルドゥー詩に現われる「泡沫」の觀念（鈴木）

この詩句には人生の無常感とは又別の一種の無力感が漂っているように受け取れるが、ムガル朝末期の宮廷に身を置いていたゾウクの絶望的な心情が吐露されているからであろう。ゾウクの「泡沫」を用いた詩句としては

友の頬なる花より 薔薇水の滴れば

川面の泡はすべて 薔薇の鏡ならん

汝の輝く顔により 川面に充ちるは

きらきら光る 泡の星屑

のような麗句があるが、これらは何れも表面的な技巧を凝らしたものに過ぎない。やはりソウダーの場合と同様に、ゾウクがカスィーダの優れた詩人であったことを考え合わせねばなるまい。

ウルドゥー・ガザルにおいてミールと比肩するウスタードのガリーブ（一七九七〜一八六九）については、ハバープなる語の使用に顕著な特徴が現われてくる。ガリーブはゾウクよりも更に少なく、現存の二百数十篇のガザルでは「泡沫」は僅か二詩句にしか出てこないものである。散佚してしまったガザルの中に幾つか詠み込まれていたのではないかという一応の疑問は残るが、これをカーフィヤの面からみても、ガリーブがハバープをカーフィヤの一つに使っているガザルは一篇しか見当たらない。この点からも、ガリーブがハバープを比喩として余り好まなかったことが感じ取れるのである。現実

主義者であつたガーリブはこの世の無常を泡沫に結び付けるような発想をしなかつたのであろうか。ガーリブの問題となる詩句は次のようなものである。

海が存在　その形あればこそ凡ては成る

沫　波　泡　それらは取るに足らぬもの

モウラーナー・ハリーはこの詩句を「ヤードガール・ガーリブ」中で、神秘主義を詠んだものであり、全存在の唯一性と幻影に過ぎぬ世の現象を比喻によつて表わした秀句としているが、ここでの「泡沫」は単に沫や波と同次元で扱われている丈でありそれ程優れた詩句とは思われないのである。

モーミン（一八〇〇—一八五二）については、真実の愛に對する仮そめの愛、乃ち現世の色恋を詠む恋愛詩の詩人として認められているモーミンに「泡沫」を果敢ない浮世の象徴と見立てるような比喻は何処かそぐわないのではないかという考えがまず浮かんでくる。実際に、モーミン詩集に収められているガザル二百十九篇中にハバーブなる語が用いられている詩句はたつた三詩句しか見出せない。それも次のような無理に作られたものである。

川の唇に浮かぶすべての泡たち

それは恋の熱が作り出すひび割れ

こうした泡沫が最早この世の果敢なさの比喻と何の関係もないことはいう迄もないが、モーミンも又或る点ではガーリ

ブと同様にこの語に触れようとしなかつたことが窺われるのである。

ここで、デリー詩派に對立する存在であるラクナウ詩派に目を向け、代表的な詩人としてアーティシュ（一七七七一—一八四六）を取り上げてみると、ハバーブの用例においてアーティシュが際立つた特徴を示していることに驚かされる。アーティシュの詩全集「クツリヤート」に収められているガザルは六百八篇で約八千八百詩句に達するが、その中でアーティシュはミールを上廻り実に二十九詩句にハバーブの比喻を用いているのである。しかし、これらの比喻は人の世の果敢なさは殆ど無縁といつてよく、何れもが現世の恋の無情、繊細な思い、愛人の心変わりなどを表わす上での技巧を凝らした華麗な比喻として用いられていることが分かる。

汝の短剣が血の河を流さば

波と泡に代え　流るゝは恋の亡骸

友よ　吾が骸　河に投ぜよ

泡沫の牢獄　恋の虜にて満たされん

血の河　汝の短剣より流れ出で

切られし首　泡沫の高みを得たり

彼の人　沐浴せんと川に下れば

魚達は打ち鳴らす　泡の銅鑼

おゝ思慮浅き波よ　心して消せ

川も又 泡の魅惑の囚人なれば

川面の泡にも勝り 繊細なる吾が心

この花園のたたずまい 吾には馴染まず

海の泡の如く 扉閉め置きぬ

錠掛けて籠もる 吾が家の内

どの詩句もこのような用法でハバープが詠まれているのである。これらの「泡沫」はこの世の果敢なさに思い沈む詩人の心情を代弁するものではなく、繊細で脆いガラス玉のように美しき物の象徴となっている。これを只単にラクナウ詩派の表面的な技巧追求の当然の帰結としてのみ片付けず、アーティシュがミールを強く意識して意図的にハバープをこのような比喩に使う方法を確立しようとした結果がこれであると解釈したい。

ラクナウ詩派の一方の雄であるナースィク（一七?—一八三八）は現在ではガザル詩人としてよりもウルドゥー語の改革者として評価されている面が強いが、その詩集に現われる「泡沫」の比喩もアーティシュと似たような詩想に基づくもので特に取り上げる程の新奇さはない。

ヘンナに染まりし手 洗うあなたの科に

川面の泡競い立ちて 目を血走しらす

ナズィール・アクバラバーデイー（一七三五?—一八三〇）はデリー詩派にもラクナウ詩派にも属さなかった詩人とし

て、又、民衆詩人として「泡沫」をどう捉えていたか興味深い。彼が奇を衒った比喩に依ることなく意外にも「泡沫」を果敢ない物の例えとして詠んでいるのである。

生存の海における友との交わり

それは水面に浮かぶ泡沫にも似る

この詩句はミールの有名な詩句と一抹の共通点をもっているが、表現の清冽さにおいてミールの句に到底及ぶものではない。ガザル詩人としてのナズィールの力量の限界を示すものである。

以上、個々の詩人について記してきたことをミールを中心にして纏めてみることにする。「泡沫」ハバープをこの世の果敢なさと観ずる思想がウルドゥー・ガザル詩人達に共通のものであることは明らかであるが、この比喩がミールによって余りにも完璧に用いられてしまった結果、詩人達の様々な対応が生み出されることになった。乃ち、ソウダーはこれを得意とするカスィーダの華麗な技法の中に包み込もうとし、ダルドは宗教者としての立場から敢えてこの比喩に頼ることを避けた。ソウクは又、表面的な技巧でこれを用いようと努め、ガリブはミールの詩句を超えられないことを知ってこの比喩を無視することにしたものと考えられる。モーミンに至っては恋愛詩の詩人としての自己の評価を守ることに終始したのであり、ナズィールの用いた比喩はミールの亜流の域

を出なかつた。一人ラクナウ詩派のアーティシユ丈がデリー詩派延いてはミールへの對抗意識を露にしてハバーブを繊細美麗な表現技法で飾りながら、これを通俗的な恋愛を主題としたガザルのための新しい比喩に仕立て上げようとはかつたということができると思われるのである。

さて、ガリブに関連して少し触れたカーフィヤについて、以下、アーブのカーフィヤの用法を既述の詩人達の作品を通じて概観してみることにする。

アーブのカーフィヤをもつ語はウルドゥー・ガザルでは二百五十程が挙げられている。この中には単語丈でなく熟語やイザーフで結ばれた語もあるし、名詞の他に形容詞なども当然乍ら入っている。各語の使用頻度には非常なばらつきがあり、普通名詞では基本単語とされる語でも詩語として固い語は各詩人の個性と関係なく余り使われない。反対に、どの詩人も繰り返し必ず選ぶような通俗的な語も多く目に付く。

ハワープ khāb 「夢」、シャラープ sharāb 「酒」などはその代表的なものといえる。こうした流行歌の不変の主題のような対象を如何に巧みな比喩として詩句に詠み込むかがガザル詩人の才能の見せ所でもある訳である。その他、よく使われる語を幾つか列挙してみると、アーブ ab、アーフターブ afṭāb、アフバーブ ahbāb、イズティラーブ iztirāb、インテ
ハープ intekhāb、ベーターブ betāb、プルアーブ purāb、

ペーチ・オ・ターブ pēc o tāb、ターブ tāb、ジャワープ javāb、ヒジャープ hijāb、ヒサーブ hisāb、ハラープ khārāb、ヒターブ khitāb、リカーブ rikāb、サラープ sarāb、サイラーブ sailāb、スィーマープ simāb、シャバーブ shabāb、シターブ shitāb、エターブ etāb、アザープ azāb、カームヤープ kāmyāb、カバープ kabāb、カムヤープ kamyāb、ギルダープ girdāb、グラープ gulāb、ヘメラープ meharāb、ナーヤープ nāyāb、ニカーブ nikāb などが目立っている。一篇を構成する詩句それぞれを独立の詩題の下に詠むことができるガザルの特質によって、意味の上では関連性に乏しいような語が同じカーフィヤということで比較的容易に同一ガザルに並び得るのである。

まず、フリーはアーブのカーフィヤを割に好んだ詩人である。彼は二十篇程にこのカーフィヤを用いているが、ガザルそのものが短かくカーフィヤも三十語足らずで変化に欠けている。単独の語としてはヒサーブが最も多く(10)、以下、ハワープ、シャラープ、アーブ、ヒジャープ、アフターブ、キターブ、ターブ、ハラープ、グラープ、ジャワープの順で、キターブを除けば以後の詩人の作品に頻出する語が出揃っている感がある。

ハーティムはアーブのカーフィヤ中にハバーブをうまく取り入れている。このカーフィヤによる十五篇のガザルをみる

と、その内六篇がハバードを含み、ワリー時代に較べハバードがカーフィヤ群の中でより注目すべき語となってきたことが分かる。使用頻度の一位はハワード(4)で、これにシャラーブが続き、以下、アーブ、カバード、ハラード、アフターブ、ヒジャード、ジャワード、ハバードとなり、ワリーのキターブに対してハーティムのカバードが対照的である他は両詩人の選択に差異は少ない。

ソウダーはその詩全集中の十六篇程のガザルにアーブのカーフィヤを用いているが、ハバードを含むものは四篇に留まっている。ハバードは詩句中にカーフィヤと関係なく詠み込まれているのであり、ソウダーが単にカーフィヤを揃えるための語としてハバードを見ていなかったことを示している。

使用されている当概語は四十を越えているが、これはソウダーの多彩な表現力を裏付けるものに他ならない。使用頻度は一〜三回の語が目立ち、多い順にアーブ(5)、ハワード、ハラード、ハバード、ターブ、シャラーブ、カバードである。

ダルドにはアーブのカーフィヤを用いたガザルが七篇しか見出せない。使われている語も十八許りで特に凝ったものはなく、この面にもダルドの技巧に頼らない簡潔な詩風がはっきり表われている。頻度はハラード(4)、アーブ、ヒジャード、ヒサード、ハワード、シャラーブ、シターブが同じく(3)である。

アーブのカーフィヤの用例はミールに至って飛躍的に豊富になり、ハバードについては既述の如く完成の域に達した。アーブのカーフィヤによるガザルはミールの詩集に収められている一七九四篇中の六十篇に及んでいる。残された作品の数からみれば約三十篇に一篇の割合になり、ミールが特にこのカーフィヤを好んだとはいえないが、ミールの特徴は比較的に長いガザルにもこのカーフィヤが使われている点である。当概語は五十九で延五百四十一でありソウダーの約四十延百余を大幅に上廻っている。ガザル詩人としてのミールが言葉縦横に操る技に如何に傑出していたかを何よりもよく物語っているのがこの数字であろう。

今これら五十九語を頻度数によって分けてみると、ハラードとハワードが共に(4)で最もよく使われ、これにアーブ(3)が続き、以下、シャラーブ、ターブ、ヒジャード、ジャワード、イズテラーブ、シターブ、カバード、エターブが二十代で並ぶという興味ある結果を得る。ミールをウルドゥー・ガザルの最高峰と認めれば、カーフィヤの用法も又ミールによって一つの頂点に達し、ワリー以降の集大成が行なわれると共に、今後に見捨てられない基本的用例を提示することになったといえよう。頻度数からの比較によってもワリーとのハラード、シャラーブ、アーブ、ハーティムとのハワード、シャラーブ、アーブ、ソウダーとのアーブ、ハラード、ハワード、

ターブ、ダルドとのハラーブ、ハワーブ、シャラーブ、アーブなど上位数語が詩人それぞれの個性を超えて共通である事はガザルのカーフィヤとして用いる上で最も適切と考えられる語が最大公約数のように存在していることを示すものである。これ迄に挙げた五人の詩人に共通するカーフィヤ用語を頻度順に並べると、ハラーブ、ハワーブ、アーブ、シャラーブ、ヒジャーブ、カバール、ターブ、ジャワーブ、イズテラーブ、ヒサーブ、グラール、ハバール、アフターブ、エターブ、シターブ、ニカール、シャバール、アザールとなる。今、一応上から十五位迄をアーブのカーフィヤにおける基本用語と見做せば、このカーフィヤに関する限り如何にこれらの用語が巧みに詠み込まれているかが作品評価上の尺度となり得るのである。又、基本用語以外の用語については、これらをどのように自然且つ漸新に詩句に取り入れることができるかが詩人の才能を誇示する機会となるのである。

ゾウクは伝えられている作品が少ないことからアーブのカーフィヤで詠んだガザルは九篇である。その内の一篇は二十詩句よりなりこれ丈で二十四の用語が並べられている。当概語は三十八で延八十九使われているが、頻度はターブ(8)を最高にイズテラーブ(6)アーブ、ベーターブ、シャバールと続き以下は頻度(3)のハワーブ、シャラーブ、ジャワーブ、エターブ、ハバールなどとなる。ミールにない用語は七であるが、

ゾウクについては散佚してしまった作品が膨大なため比較は困難である。

ガリブについては既述の如くハバールを含めアーブのカーフィヤ自体を余り使用していない。「ディーワーン」に収録されているガザルでこのカーフィヤによるものは六篇に過ぎず、「ディーワーン」未収録のガザルでも同じく六篇があるだけである。当概用語は四十一でこれが延九十五使用されている。数の上ではソウダーと似ているが、ソウダーがミールにない用語八を使っているのに対しガリブはイルディハール、トゥラール、ミズラールなど十三語を加えている。頻度数は順にハワーブ(8)、アーブ(5)、シャラーブ、ターブ、ベーターブ、サイラーブ、イズテラーブ、ニカール、アフターブとなり全体として基本用語の域を出ていない。特に上位の三語は面白い程他の詩人と同じである。

モーミンは八篇のガザルにアーブのカーフィヤを使っている。モーミンもガリブと同様にこのカーフィヤを余り用いていない。当概語は五十で延百四使われているのはガリブと大した差がない。デリー詩派後期の両ウスタードを規準にすればアーブのカーフィヤに用いられる語数は一詩人平均五十、延百前後といったところであろうか。モーミンの用語の特徴は頻度でイズテラーブが最も多いことである。恋の煩悶や懊悩を表現するのに又とない適語としてこの語は多くの詩

人によって使われているが、特に恋愛詩の詩人モーミンの手に掛かるとイズテラープは一段と精彩を放つのである。ミールにない語はニーム・ハワープ、ナーカムヤープ、ナーサワープなど十三語でモーミンらしいひねった語が目につく。

アーティシュはアープのカーフィヤの用語そのものについては寧ろ伝統的で新奇さがない。やはり使用し易い語と詩句に馴染まない語は自ずから分けられているのであろう。アーティシュは当概語五十六を延三百二十五使用しているが、「クツリヤート」に伝えられているガザル六百八篇は数の上ではミールの約三分の一であるから、アープのカーフィヤについてはアーティシュの用例の方が豊富であるということができる。アーティシュが使用しミールが使っていない語はアープ・トゥラープ、バドハワープ、ベーヒサープ、バートウラープ、パーヤープ、テザープ、ダープ、ヒザープ、ホツシャープ、リカープ、スルハープ、サンジャープ、シハープ、サワープ、ウンナープ、ウカープ、ラージャワープ、ナーサワープの十八であり、一方、ミールにあつてアーティシュが用いていない語はアトナープ、アルヒサープ、イジティナープ、エフテサープ、ベーニカープ、バルアープ、バールヤープ、ブルアープ、ブルタープ、ジュツラープ、フーナープ、ヒタープ、サラープ、セーラープ、シタープ、カムヤープ、マイナープ、マープ、ナープ、ナーヤープの二十である。互

いに使用しない語の数において両詩人が拮抗している点は留意されねばならない。乃ち、ソウダー、ガリープ、モーミンの例を合わせてウスタード間のカーフィヤ用語の異同は二・四割程度と推量してよさそうである。頻度の上からアーティシュの用語をみると、まずアーフタープ、ハワープ(29)が並び、これにシャラープ(25)、アープ(17)、ハバープ、ジャワープ、グラープが続く。後はハラープ、タープ、マハタープ、カバープの順になっている。上位にハワープ、シャラープ、アープが並んでいるのはワリー、ハーティム、ミール、ダルド、ガリープと一致している。一位のアーフタープ「太陽」はモーミンのイズテラープと同様に詩人の胸の奥底を探る上での重要な鍵である。アーティシュにおける「太陽」は限りなく力強く動的なものへの憧憬の象徴として存在していると解釈することができるが、こうしたカーフィヤ頻度一位の語は特に注意して扱われねばならない。アープのカーフィヤについて一応の結論を付ければ、このカーフィヤでの三大用語はハワープ、シャラープ、アープであるということができよう。小論では「泡沫」の比喩に焦点を当てて考察を進め、併せてカーフィヤのもつ意味の重要性についても新しい角度から検討してみた。今後、特定の比喩とカーフィヤについて同様の分析を試みていきたいと考えている。

(東京外国語大学教授)